



天使の笑顔が見たいから。
クラウンになった、ひとりの若者の物語。

vol.2 キッズクラウン講座の立ち上げ ～子どもはみんなコメディアン～



玉井良平 Ryohei Tamai

短大卒業後、2004年にオーストラリアでクラウン(道化師)に出会う。帰国後、保育園に勤務する傍ら、子どもたちの創造力の向上を目指してクラウンを学んでもらう、キッズクラウン講座を立ち上げる。10年にカナダに渡り、日系の子ども達を対象に行なった同講座も好評。今回、クラウンを通して得た体験を初めて執筆。日本のキッズクラウン達を連れて、カナダで海外公演をする事が新たな夢となっている。
www.child-entertainment.net

帰国の時を同じくして、奇しくもG・JAPANというエンターテインメント会社が大阪に進出してきていた。僕は迷わずクラウンクラスを受講した。同じ道を目指す“芸人”仲間も出来た。早速、パフォーマンスをさせてもらえる場所をいくつか当たり、オーディションを受けたり、ワークショップがあると聞けば、可能な限りどこへでも出かけた。□コミやホームページの宣伝効果もあり、依頼が舞い込むようになった。

名古屋の“医学会”にて余興をしたり、イギリスに住む友人からの依頼で海外公演に行ったこともあった。

正に「無我夢中」だった訳だが、パフォーマンスにも余裕が出てきた頃、“あること”に気がついた。一見おとなしそうにしていたり、恥ずかしそうにしている子ども、ステージに上げると、まるで別人になったように喜んで“芸”を披露するのだ。子どもは「人を喜ばす」事が大好きだった。

僕は一計を試みた。ショーの最後に「何か面白いことが出来る人」と叫び、片っ端から子どもをステージに上げるのだ。このアイデアは瞬く間に好評を博し、僕のショーとは比べ物にならないくらいの大盛り上がりを見せるようになった。それを見たある保育士さんがこう呟いた。「○○ちゃんってあんな一面があるんやあ…」そ

の驚いた表情を見て僕は考えた。「子どもにクラウンを教えることは出来ないだろうか？ 親や教師が驚くような表現や、ユーモアが子どもの中からどんどん生まれてくるかもしれない。そうだ！ キッズクラウン講座をやってみよう！」

実家の近くの施設を借り、広告を創った。幸いにも新聞社が取り上げてくれたこともあり、初回に13名の子どもたちが集まった。

「子どもが笑う講座」をコンセプトに講座では、なるべく子どもに指示しないようにした。のびのびした表現を待ち、それを自由に表現させた。子ども達の楽しそうな表情を見る度、僕自身の居場所もここにある事を実感した。

3か月の「ビギナークラス」を7名が卒業、その後には設けた「アドバンスクラス」を5名が受講、無事卒業していった。そして驚いたことに「まだやりたいい！」と言う生徒が3名いた。僕も「こうなったらとことんやろう」と思い、その子どもたちと一緒に色々なイベントに参加した。障害者施設、老人ホーム、結婚式の余興を頼まれた事もあった。各イベントで頂いたギャラは、キャンプなどを企画し、その経費に充てた。

1泊2日でキャンプ場に連れて行った時の子どもたちのはしゃぎっぷりは、それはもう相当なものだった。ある障害者施設の夏祭りのイベン

トに訪れた時の事。イベントが終わり、撤収作業で忙しい大人達を尻目に、夕暮れの縁側で鬼ごっこをしてはしゃぐ子どもたちを見ながら、ある保護者がこう僕に話してくれた。「あの子は学校では自分を出せないでいるが、ここでは本当に嬉しそうにしている。キッズクラウン講座はあの子にとって笑顔でいられる場所なんです」本当に、本当に嬉しかった。保育士の時には出来なかつた子どもとの関わりを講座では持つ事が出来たのだ。この講座は、僕自身にとっても無くてはならない大切な居場所になっていた。僕はある決断をしていた。このキッズクラウン講座を僕の“本業”にすることを。

それにはスキルアップが必要不可欠と、僕は再び海外へ行く事を決めた。行き先はカナダ。シルク・ド・ソレイユの本拠地、モントリオールだ。

